

肺がんの手術 について

肺は心臓と同じく生命維持に直接関わる重要な臓器です。そのような場所にがんができると、呼吸に障害が生じ、命に危険が及びます。今回は、肺がんとその手術について、呼吸器外科の滝沢診療科長にお話を伺いました。

肺がんとは

肺がんは、肺を構成する肺胞や気管支の細胞ががん化して発生します。原因にはタバコその他、アスベストなどの化学物質の吸入もありますが、原因がはっきりとしないものも多くあります。肺がんの症状は、咳・血痰・息苦しいなどといったものがありますが、それらは病気が進行してから現れます。早期発見には、CT検

査や喀痰細胞診などが役立ちますので、心配な方は検診や人間ドックを受けることをお勧めします。



■説明は
徳島大学病院
呼吸器外科 診療科長
滝沢 宏光
(たきざわ ひろみつ)

■お問い合わせ先
外科外来
Tel: 088-633-7136

患者さんへ ひとこと

肺がん手術は日々進歩しています。これからも患者さんにとって、より負担が少なく精度の高い治療の提供に尽力してまいります。

肺がん手術の適用条件など

肺がんに対する手術は、がんを完全に取りきることを目標とした治療です。肺がんのステージ(病期)はⅠ期からⅣ期までであり、そのうちⅠ期からⅢA期が手術の対象となります。ⅢB期以上は手術では取り切れないがんであるため、放射線治療や薬物治療が治療の中心となります。手術の対象となる患者さんでも、やや進行したステージの場合、手術だけでなく薬物治療も併用するのが一般的です。また、手術実施の条件には、がんのス

テージの他に「手術に耐えられること」も必要です。心臓や肺の機能に十分な余力があることも、手術を決める上で大切な要素になってきます。

徳島大学病院では手術を行う呼吸器外科、薬物療法を行う呼吸器・膠原病内科、放射線治療を行う放射線科のメンバー全員が治療方針を討議する「呼吸器合同カンファレンス」が毎週開催されていて、個々の患者さんに合った治療を決定し、連携しながら治療にあたっています。

より負担の少ない手術へ

肺がん手術は、傷が小さく、身体への負担が少ない胸腔鏡手術が主流となっています。ロボット支援手術も胸腔鏡手術の一種であり、現在保険適用となっているため、本院でも積極的に実施しています。

また近年、がんの大きさに合わせて、肺の切除範囲もで

きるだけ小さくする、という考えが主流になってきました。従来の主流であった肺葉切除から、切除範囲を小さくする区域切除または部分切除を行うことで、できる限り肺機能を残し、患者さんの負担を少なくしようとする「積極的な縮小手術」が本院でも多くなってきています。

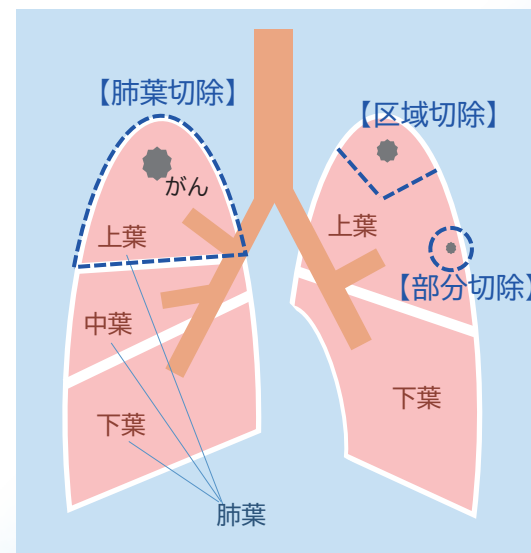
正確な手術を目指して

縮小手術の件数は増えていますが、小さながんを小さな切除範囲に正確に捉えることが求められるようになってきました。呼吸器外科では、外科医の技術向上に努めることはもちろんのこと、立体CT画像を用いて綿密な術前プランニングを行い、がんの術中マーキン

グ法を工夫するなどして、正確な縮小手術を行うことができるよう日々努めております。



手術支援ロボットを用いた肺がん手術のトレーニング



(図) 肺がん手術の切除範囲